

### 新たな歴史に向かって

### 鳳エリア建替え運動の道 10

## 鳳病院での思い出

私は1971年、鳳東町にあった耳原鳳分院の時に就職しました。当時は同じ敷地内に立つ生活と健康を守る会と連携して、美木多を含む福泉地域の医療や福祉を守る運動を、地域ぐるみ・家族ぐるみで楽しく活動していました。



鳳病院時代の  
大坪笑子さん

1973年険しい同和行政の中で、耳原総合病院の土地取得問題、現地で建て替え問題に大きな妨害がありました。妨害の攻撃があると鳳で仕事をしていたも車に飛び乗り、当時カマボコ型であった耳原病院の玄関前にスクラムを組んで妨害と闘いました。足は震えながらも大きな声で「妨害やめる、協和町に耳原は必要だ」と地域の方々と共に闘い役所に座りこんだ



1981年建設中の耳原リハビリテーション病院

1995年ごろ、病院拡張にむけた土地購入が難しい状況の中、総合病院の機能の一部を鳳に移す計画が持ち上がり、鳳にリハビリ病院と外来専門の新クリニックを建てる方針が決まりました。しばらくして、当時の理事長であった北條信一さんはじめ地域の方々の

ご尽力で協和町の土地購入拡大が実現する事になったことから予定されていた鳳・新クリニック建設計画は中止となり、リハビリ病院内の1階に急遽外来機能を併設する事になりました。

しかし2008年には医師不足によって泣く泣く病棟を総合病院に移さざるを得なくなり、耳原鳳病院は現在の耳原鳳クリニックに至ります。  
(次号へ続く)  
大坪 笑子 元・耳原鳳病院事務長/2007年同仁会退職/現在・NPO法人結いの会ともうず代表理事)

## 耳原総合病院 第50次辺野古支援 連帯行動に参加して



沖繩の基地は日本国内の米軍基地約7割、県内面積15%を占めています。その中でも普天間基地は、米国防長官に「世界一危険な飛行場」と言わせるほど住宅のすぐそばにあります。仮

に、戦争になつて基地が攻撃されると沖繩の地形が変わるとまで言われています。基地の騒音はさまざま、飛行機の音とは違う戦闘機の音は大きすぎては恐怖を感じました。  
美しい辺野古の海を埋立て、移転させようとする施策に対する辺野古ゲート前の座り込みは、「1分1秒でもながく工事が止まる」との思いから現在も続けられています。今回、座り込みに参加し、沖繩の方たちの声を生で聞く機会になりました。命がけで基地移転に反対している住民たちの「あきらめない」思いに、「自分たちも何かしないと」と強く感じました。事実を正確に伝え、何を大事にすべきか、憲法9条の思いを大事に、あらゆる戦争政策に反対の声をあげる意識を高めることができました。



支援当日は日曜日で、辺野古基地建設の座り込み行動に参加できませんでしたが、基地やひめゆりの塔の見学、講義などを体験し、基地建設の問題や戦争と平和について学びました。

美しい辺野古の海を埋立て、移転させようとする施策に対する辺野古ゲート前の座り込みは、「1分1秒でもながく工事が止まる」との思いから現在も続けられています。今回、座り込みに参加し、沖繩の方たちの声を生で聞く機会になりました。命がけで基地移転に反対している住民たちの「あきらめない」思いに、「自分たちも何かしないと」と強く感じました。事実を正確に伝え、何を大事にすべきか、憲法9条の思いを大事に、あらゆる戦争政策に反対の声をあげる意識を高めることができました。

また県民投票結果が無視され、辺野古基地の設計変更問題に国の代執行が行われようとしており、地方自治の権利を奪われている現状は沖繩だけでなく日本全体の問題であると感じています。屋久島沖にオスプレイが墜落したニュースを聞き、今も危険と隣り合わせで生活を続けている沖繩の現状は絶対に変えなければいけないと改めて実感しました。

アメリカ国内では絶対にしないであろう市街地への基地建設や戦闘機訓練を日本で平気で行う。そのことを日本政府が許していることの問題意識を共有しないといけないと思います。

軍拡ではなく、戦争のない平和な国が続き、国民に寄り添った政治になるように、今後も多くの方たちと一緒に行動したいと思います。

(耳原総合病院 副技師長 大楠 和之)

## 「自分の心の中にある自分らしい花」を咲かせよう

### みみはら在宅クリニックで



みみはら在宅クリニックでは雪が舞う中、12月21日壁画イベントワークショップ



プを行いました。堺市文化芸術活動応援補助金事業に採択されたこの企画に、ファシリテーションアーティストとしてペンキ画家SHOGENさんをお招きしました。SHOGENさんはアフリカのタンザニアで確立されたポップアート「ティンガティンガ」を修行されています。

「あまり考えずに思いきり描いて!」というSHOGENさんの声かけのもと、参加者は下書きなしで思い思いに「自分の心の中にある自分らしい花」を描きました。患者さんのご家族や、職員やそのお子さん、アートボランティアなども含めて30人ほど参加し、色も形も違う花ではありますが、どこか共存している絵が完成しました。



描いた後はしばらく花たちを眺める姿も見受けられ、花を通してゆつくり想いを共有できる場所になったのではないかと思います。

3月にはここにチューリップやブルーゲンブリアなどを植えた「花束花壇」を作れるように計画を進めています。

育った花を患者さんの元へ持って行きたい!という看護師さんの素敵なアイデアが実現できそうです。

(アートセクション 衛藤 桃子)